



20年来グローバル コミュニケーションズ エキスパート。元JAXAエグゼクティブ アドバイザー(広報・国際担当)、国立大学法人山口大学客員教授(国際関係+コミュニケーション論)、評論家・オピニオンリーダー。東京生まれ、英国育ち。講演、テレビ、執筆、政府委員など、マルチに活躍する中で、IRと都市開発のコンサル会社代表も務める。
<http://www.nishiuramidori.com>

連載 第4回

「国際派大和撫子」が伝える宇宙の開発現場

にしうらみどりの

「宇宙の窓から」

「打ち上げ」と「有人飛行」

業 界用語」といって、「芸能界で通じる言葉」という意味

に受けとめられるこの頃ですが、宇宙コミュニティ独特の表現も、もちろん少なくありません。20年の間に様々な分野のコンサルティング、グローバルコミュニケーションを手がけてきた筆者は、異業種用語には慣れっこです。

CCといえば、モードの世界ではココ・シャネル。ビジネスオーデイトではコストカットイング。CDといえば、ミュージックビジネスではコンパクトディスク、流通ではコストダウン。まさにそれぞれ。

そんな調子ですから、「昨日打ち上げたの、帰ったばかり」と友人に言えば、「一晩中飲んでいたの?」というリアクションも、筆者がJAXAの仕事をするようになった初期の頃は、珍しくありませんでした。

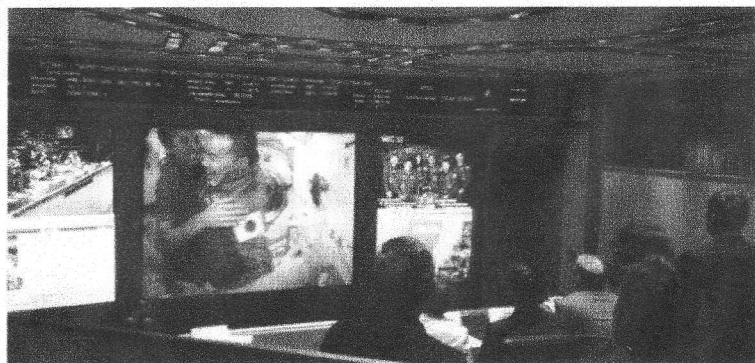
そうだ、世間では、打ち上げといえど飲み会でロケットの打ち上げという発想はないのだということとを思い知らされたものです。

そこで、ロケットの打ち上げが

いかに美しく、素晴らしいものかを、少しでも伝えられたらと思えます。言うまでもありませんが、人類の発展、国民の生活を豊かに、そして人々を守る衛星をロケットに搭載して打ち上げるからこそ、必要不可欠なことは皆様もご承知の通りです。とはいえ、ロケット打ち上げを間近に見た人は、その音や視覚的美にも魅了されるのです。

筆者の打ち上げ見学第1号は、2006年に行われた運輸目的衛星2号機MTSAT-2「ひまわり7号」搭載のロケットHIIA9号機の打ち上げでした。施設増設が急務ではありますが、今までは、世界一美しい射場と名高い種子島宇宙センターからの打ち上げでした。日本の英知、技術の証明を目の当たりにして、国民として大きな誇りと感動を胸に抱いたのを鮮明に記憶しています。

それからは広報職務もあり、幾度か打ち上げ見学を体験しましたが、中でも、昨年、星出彰彦・宇



打ち上げ2日後にISSに到着し、迎え入れられる星出宇宙飛行士。モスクワのロスコスモス巨大スクリーンに映し出される(筆者撮影)

宙飛行士ら3人を乗せたソユーズ宇宙船がカザフスタンのバイコヌール宇宙基地から打ち上げられたときは、衛星でなく、人間が宇宙に旅立つということに、改めて感銘を受けました。

このとき、星出さんがISSに4カ月ほどの長期滞在を果たしたのです。有人宇宙飛行には、国民の理解と資金が必要不可欠ですが、我が国独自の有人飛行船の開発が待ち遠しいこの頃です。